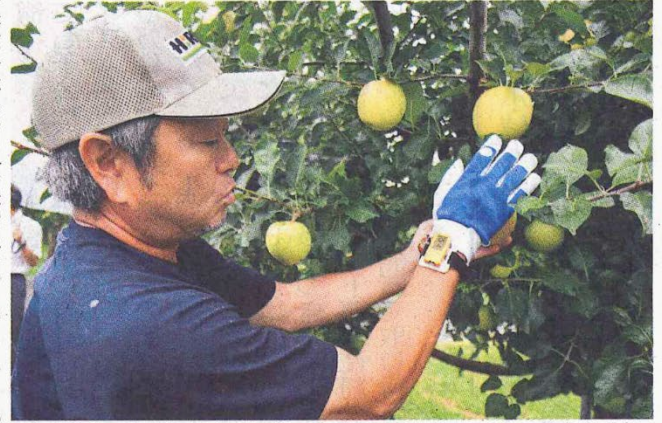


収穫適期のトキ見極め

弘果総研と 弘大共同研究 試作センサー試験会



収穫期を控えたトキにカラーセンサー試作機をかざす岩崎さん

弘前市の弘果総合研究開発と弘前大学農学生命科学部は14日、黄色系リンゴトキの最適収穫期を見極めるため共同研究したカラーセンサー試作機のモニター試験会を開いた。実際に試した生産者からは「リンゴに詳しくない人でも収穫適期のトキを選べる」との声があり、今後の実用化が期待される。

黄色系品種は果実が熟度を増すと緑から黄へと変化するが、赤色系品種に比べると色の変化が分かりにくいとされる。近年は収穫期前のトキが出回る早もぎ問

題が起きていることから、生産現場を支援するカラーセンサーを共同研究で試作した。

試作機はグローブにカラーセンサーを付け、果実の表面に近づけると色味を測定する仕組み。トキの熟度に応じた色味のうち、どの段階になっているかを数値で表示するほか、スマートフォンを通して音声表示することも可能だ。

弘前大農学生命科学部で農業機械やスマート農業などを専門とし、開発に携わった張樹槐教授は「弘前大で育成した黄色系品種

『こうこう』の熟度を把握するカラーセンサーの研究をしており、これを活用した」と説明。試作機は現場で使いやすいよう軽量化や低価格化も図られた。

14日のモニター試験会は、市内にある岩崎智里さんのリンゴ園で開催。収穫を間近に控えたトキに岩崎さんがセンサー試作機を当て、使い勝手を確認した。

岩崎さんは「軽くて邪魔にならず、反応速度も速い。

リンゴにあまり詳しくない人を繁忙期で雇う際、こういったセンサーがあれば非常に便利だと思う」とし、「実用化した場合はできるだけ安価だとありがたい」とも述べた。

弘果総研は「実用化には数年を要すると思われる。今後はさらに生産者の声を拾い、地元企業をパートナーとして製品化したい。品質の良いトキ出荷に役立てられたら」と期待した。

（下山和枝）

この画像は、当該ページに限って”陸奥新報”の記事利用を許諾したものです。

転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。